

令和4年4月15日発行

2022年

4月号

年4回発行(1. 4. 7. 10月号)

No.1086

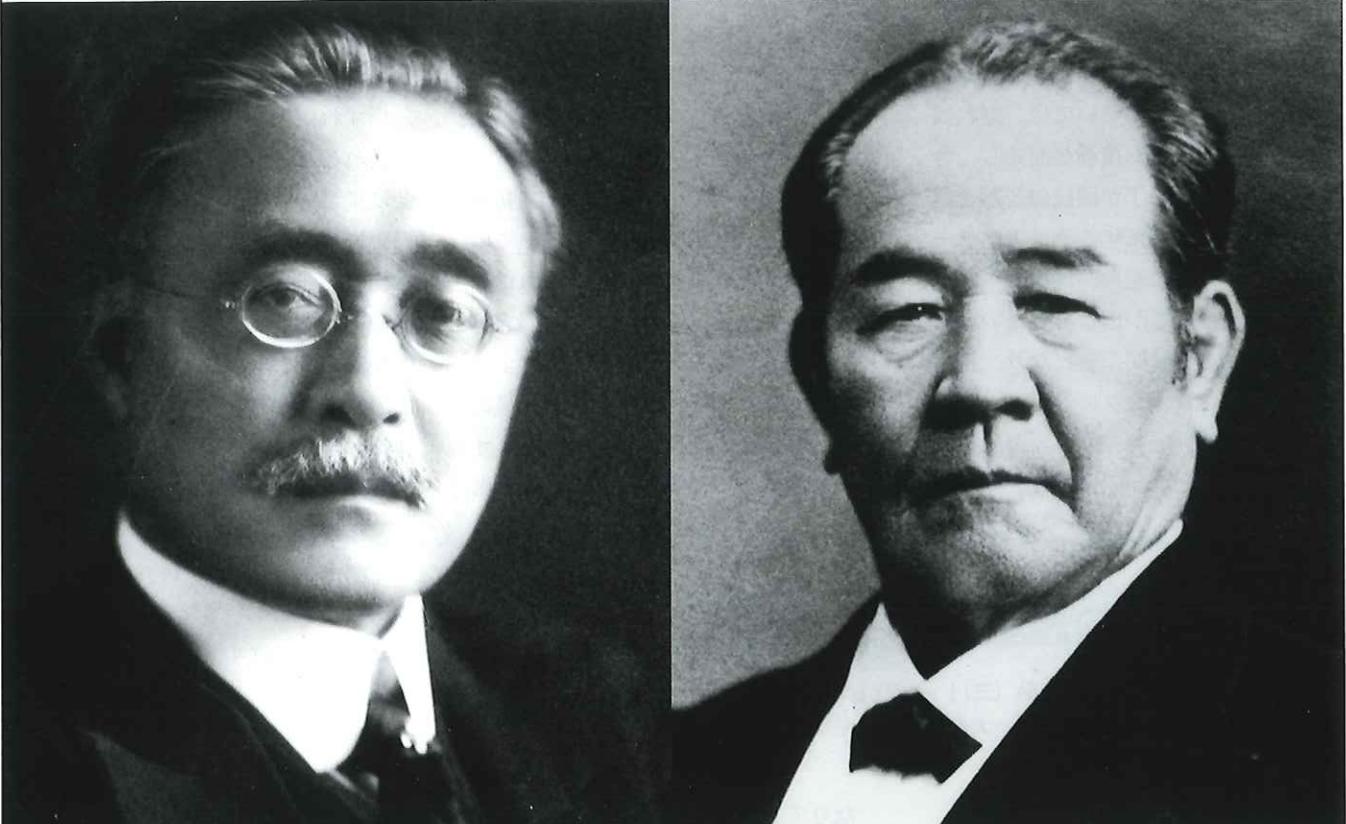
(学)日本力行会

RIKKO SEKAI No.1086 力行世界 令和4年4月15日発行 (1)

力行世界

RIKKO SEKAI

日本力行会の発展に貢献された、新渡戸稻造翁（左・青森・新渡戸博物館所蔵）と渋沢栄一翁（右・埼玉県深谷市所蔵）



日本力行会の発展に貢献された、新渡戸稻造翁（左・青森・新渡戸博物館所蔵）と渋沢栄一翁（右・埼玉県深谷市所蔵）

創立1897年1月1日



目次

コロナ禍2年目をむかえて 2	日本力行会と渋沢栄一の接点： 人的交流の観点から(1) 10・11
島貫兵太夫の履歴と日本力行会の 設立 その② 2～5	資料修復作業 12
りっこう幼稚園だより 6・7	各国からの年賀状 12
りっこう学童クラブ 8・9	力行だより、会費お願い 12

コロナ禍 2年目を迎えて

2020年1月末から世界中をパンデミックの状態に陥れたコロナウイルスは、様々な変遷を迎えながらついに流行状態が2年目を迎え、今なお明るい見通しが見えず、人類に対して閉塞感を与えるのみならず、希望すら見い出せない長期戦を迎えていた。昨年6月にお届けした機関紙「力行世界」の冒頭、一刻も早く暗黒から抜け出せることを祈念すると述べ、その後、日本においては、遅ればせながらワクチン接種が開始し、今では2回目接種終了が国民の8割を超える、年末までは、来年こそはアフターコロナを本格的に迎え、地球レベルでの人流再開を誰もが信じていたのであるが、それも束の間の夢となり、日本列島は今まさにオミクロン株による第6波感染爆発が発生、再び我慢の時間を迎えることとなっている。

この間の動きとしては、幼稚園や学童クラブにおいては、一学期当初は午前保育や午前授業で、いつも以上の懐たどり対応となりながらも、幸いにして現場でのパンデミック感染は発生せず、2学期以降は通常保育となり、密を避けながらの工夫して実施された様々な行事も予定通り実施され、少しずつ普段の姿に戻しつつある。その点においては、幼稚園及び学童クラブの教職員や指導員の担当者の並々ならぬ努力に敬意を評するところである。

一方、力行会館においては、当初秋から国際館一棟借上契約による多くの留学生の入館を期待して受け入れ準備を進めていたが、度々の緊急事態宣言により、留学生の入国禁止措置により願い叶わず、また今春に再度の大量の留学生入館予定に期待をかけるも、オミクロン株流行による海外からの入国

禁止措置で2度の入館キャンセルにならず仕なし状態となった。ただ、日本政府は、日本と海外の架け橋となる人材育成としての留学生の受け入れはこのままでは国際問題になる可能性が大きくなってきたことから、あわよくば今春からすでにビザを発給済みの留学生から徐々に受け入れる予定であり、わずかながら光明が見えてきたように思える。

いずれにしても、いずれ必ず終わりが訪れることと信じ、まずは日本力行会に集う方々の健康を第一に、当会の歴史を今一度見つめ直し、こんなご時世に当会としてこの世の中に果たすべき使命を忠実に実行することが大切ではないかと思います。そのためには、まず、創設者の歴史を皆様と一緒に辿るべきと思い、先号でも取り上げた論文の続きを掲載することとします。

島貫兵太夫の履歴と日本力行会の設立 その②

「キリスト青年たちの移植民運動（三）—近代日本における労働会の系譜—より抜粋
大熊智之著（キリスト教文化 2019年vol.14より）

島貫兵太夫と国家

押川は熱心なナショナリストであり、キリスト教の伝道によって国家を救済しようと考えていたと前回に論じた。日本力行会の創立者である島貫は国家についてどのように考えていたのだろうか。島貫が自らを振り返った自伝的著作『力行会とは何ぞや』（警醒社、1911年）を手掛かりに確認してみたい。

同書の序において、執筆の理由を次のように説明している。

（日本力行会が——引用者注）実際国家と同胞との幸福を増進するの能力ありや又国家と個人との幸福を却て害して居るものであるか……今に

なりて見れば余も之を説明するの義務あるが如くに感ずるのである¹

力行会ははたして国家と同胞との幸福を増進するのか、国家と個人との幸福を害しないのか。つまり国家への貢献度から会の意義を説明することが同書執筆の動機として挙げられている。同書でつづられる彼の半生のなかに、このような国家を標準とした思考を示すエピソードはことかかない。

島貫も押川と同様、士族の出身であった。明治維新後は「全く亡國の民」となり、「かゝる悲惨な家庭に人となつたが故に幼い無邪気な頭にもしみべーと亡國民の味を味ふた」という²。国家への強い思い入れはこのように士族とい

う出自と維新という境遇によって物心ついたときにはすでに芽生えていたのかもしれない³。

キリスト教を国賊と聞き、国外に放逐してやろうとの考え方で研究したが加えて信者になったという入信のエピソードからも、彼のものごとの判断基準には、国家にとって良いものかどうかが大きな比重を占めていたことがわかるだろう。後に彼が著した『軍人と基督教』は、キリスト教信者となつても忠君愛國の精神が弱くなることはなく、かえって強くなることを解説している⁴。

受洗からほどない頃、学校の同僚にキリスト教について説いたことによって、校長をのぞいた他をことごとく信者にしたことがあった。彼にとって伝道の原体験とでもいべきこのできごとについてもやはり、「實に愉快で國家の為に神國の為めに大なる仕事をした」と感じた⁵。信仰を持った当初から彼のなかでキリスト教の伝道は国家

への貢献と固く結び付けられていたのである。

自立への憧れ

島貫は伝道がどのように国家に貢献すると考えていたのであろうか。朝鮮視察旅行から帰国した彼が発表した朝鮮伝道論の中からそれを読み取ることができる。なぜ宗教によって国は救われるのか、それは宗教が「国民の元気、国民の精神を養ふべき大原」だからである⁶。つまり朝鮮人民が「東洋の最貧国民」であり、鉄道や道路のインフラが未整備で一般の軍艦さえも買う力がないのは「之れ皆な国民の元気精神の魔睡せるが為め」にそうなっているのだという。よって宗教によって国民の元気精神を養うことで、国を救うことができると考える。

こうした彼の朝鮮伝道論は、日本人が自らの力で伝道する必要を強調することとなる。他国を救おうとする者が西洋から支援を受けながら伝道することはできない、と考えたからである。彼は「人に助けられて始めてなし得べき事業は如何に必要に迫り居る事と雖とも之を中止するを可とす」、自然の道理に背くので「そは人間の取るべき方針にあらざればなり」とまで述べている⁷。こうした自力で伝道する態度は、朝鮮伝道にかぎらず伝道一般について島貫が強調したことであった。当時の国内の教会についても、今まで何気なく外国の補助のもとに拡大をしてきたと指摘し、教会は独立自給して伝道しなければならないと論じた。彼はこれを「真正の伝道」と呼んだ⁸。人を救おうとする者はまず自らが自力で立つ者であらなければならないということである。

したがってのちに彼が伝道の対象を国内へと転じて力行教会を建てたとき、教会が掲げる基本方針には次のような文言が含まれていた。

わが生れし国家を何れの国よりも勝りて熱愛する団體也、……教員は

基督の淳き御精神を實際に日々の生活に力行する團體也。人道主義を實際に力行するか主とするが故に常に逆境者の親友を以て任する團體也、肉と靈との二つの救を裏する人には之を興ふる事を期する團體也、わが生れし國家を何れの國よりも勝りて熱愛する團體也、基督を信するによりて何人も救はるべきを信する團體也、此世は無限の愛を有し玉ぶ天父の愛麗し玉ぶを信する團體也。此信仰によりて各命せられし天職を成さんが爲に健迄も奮闘するを以て人生の目的と信する團體也、現世に於てかくの如き教会の神の御旨に、

教員各自は無給傳道者を以て任し月に必ず一人以上を

基督教に獻するを以て最上の光榮にして且つ最も高き事業

なるを信する團體也、教員は同時に逆境者の肉體を救

ふの賭程の事業をなすを以て最も愉快にしてナザレのイ

エスに應ず所以の道と確く信する團體也、而して之を支

ふるの資金は我等日本人か之を支弁して一厘一毛も外國

入り受けざるを可と信するもの。

若しそれ全國各地の内外人が我等の主張を不可とせば能

ても其批判をきくか辭せざる事を聲明するもの也。



力行教会を紹介する記事（『救世』5巻81号）

同時に逆境者の肉体を救ふの諸種の事業をなすを以て最も愉快にしてナザレのイエスに尽くす所以の道と確く信する団體也、而して之を支ふるの資金は我等日本人か之を支弁して一厘一毛も外国人より受けざるを可と信するもの。⁹

力行教会は何よりもまず逆境者を日本人が自力で救う組織として誕生したのであった。

ところで、かつて彼が入学した仙台神学校では、神学校とは生徒のことを補助するものである、という学校の方針によって、生徒は学校からの補助で生活していた。これに対して島貫はじめ自活をするといつてきかなかったという¹⁰。神学生になった当初から後の自給伝道論へと連なる考えをすでに持っていたことが分かる。学資・生活費を自弁して学ぶということはすなわち苦学を意味した。仙台に苦学生を支援するはじめての労働会が誕生したのも、自活して学ぶことを理想とする島貫と無縁ではない。彼のもとをあるとき故郷から二人の少年が学校に通いたいと訪ねてきた¹¹。彼が手配して牛乳配達をやらせ家賃の補助などもしてやったところ、苦学がある程度うまくいったことがきっかけとなり、押川による同情もあって労働会が組織されたのだという¹²。人を救うとは、まず自分が立つことである。こうした彼の考え方の内に、「真正の伝道」と苦学生支

援との結節点を見出すことができる。

アメリカ視察旅行と渡米奨励

苦学生の支援を目的とする日本力行会がその一環として渡米奨励をはじめたのはどのような経緯からだろうか。第一に、そもそも日本力行会を設立する以前から、島貫のなかに貧民救済の方策の一つとして移植民という考えがあつたことが指摘できる。東北学院を卒業した直後、彼は北海道を巡回中に札幌で重い病におかされた。そのとき考えたことを次のように述懐している。

余は遂に死を覚悟せねばならなくなつた、そこで小野氏（同窓にして伝道師）を呼んで自分の年来の志を語り信太氏（今北海道学田事業主幹）其他札幌農学校在学の友人等には日本の貧を救ふには此北海道の様な富裕な土地もある事だから只伝道を口だけにして置かないで此様な地へ内地の貧民をどしどへ移住させ様にしたいものである事を呉々も話したものであった¹³。

このように北海道移民を救貧策として考えていた。信太は押川と武市安哉が計画し頓挫した開拓労働学校構想を引き継ぎ、学田農場を主幹していた人物である。この回想からだけでは確証は得られないが、島貫は押川がかつて目指した北海道での活動について聞いたこ

とがあったのかもしれない。

第二に、日本力行会の活動が行き詰っていたことがある。会の活動への支援を求めて『慈善新報』を発行し、月1銭の賛助費を募った。賛助者は日に500人に達することがあったというが、それでも増える会員を支えるには不足していた¹⁴。

当初、会員たちが取り組んだのは筆紙墨の行商であった。しかし、まったく利益をあげることができず、次に新聞配達や牛乳配達を始めることにした。ところがこれも思うようにはいかなかった。とくに牛乳配達は業務の過酷さに加えて、競合する他社からの妨害などもあり行き詰っていた¹⁵。

事業が軌道に乗らないため会員たちの意気も下がってきた。何よりこのままでは「苦学生の救助が出来ぬのみか、自分迄が彼等と共に飢餓に遭る事になつて仕舞」うと考えた¹⁶。人を救うとは、まず自らが自立つことであると考える島貫にとってそれは、単なる活動の成否以上に深刻な問題だったはずである。

そこで彼が活路を求めたのがアメリカであった。アメリカの学生は労働しながら大学まで卒業するとの話を耳にし、新しい苦学生救済の方法を探るためにアメリカの学生の状態を調査することにした。1897年11月から半年間、彼はアメリカで視察旅行を行った。アメリカ各地で大学生の苦学生の状態や慈善事業の様子を視察した結果、次の3点を確信する¹⁷。

一、日本の苦学生を苦学させるには渡米させるに限る

一、靈肉救済は20世紀以後の大勢

的なキリスト教の伝道法である

一、すべての事業は事務的に運ばれる必要がある

靈肉救済とは、靈すなわち心を救済するのみならず、肉すなわち生活の救済を行うということである。では事務的とはどのような意味であろうか。少し後のものではあるが、『救世』誌上



出帆者と島貫兵太夫（前列右から2人目）（1906年、日本力行会蔵）

の記事から読み取ることができる。伝道者は信仰と徳望のみならず「事務的才幹」が必要であるとし、「教務を整理して速かに効果の挙かる様に組織的なる伝道をなさゝるべからず殊に其經濟的事務を整備するの才幹」が欠かせないと解説される¹⁸。教会が外国の助けを借りず自立自給しようとすれば、富裕層を信者に獲得することが有効である。しかしちろん島貫はその方法を選択しない¹⁹。むしろ貧民救済をしながら、そのためにこそ自立自給しようというのである。それには伝道する側が経済的に運営する力を持つことが重要であった。

こうした見地から会の事業を整理し、まもなくして力行会は苦学生を救済する苦学部と、渡米を支援する渡米部とに分けられた。

日本力行会の活動

島貫が設立した日本力行会の活動とはどのようなものであったか。東京精勤会から日本力行会と改称し組織が再編された1900年、会の目的は「貧窮なる男女の学生を補助周旋し自給勉学其志を成さしむるにあり」と説明されている²⁰。その後、島貫の渡米から10年近く経った頃の事業報告には、渡米部、苦学部、修養部、職業紹介部、神

学部、伝道部、英学部、西洋料理部などの名前を見つけることができ、様々な事業を展開していたことが分かる。

一九〇九年の苦学部報告を見ると会員数は次の通りである。

今本部に修養中の此部会員は15名、市中各所にて奮闘中の者150余名各其地方には諸種の事業に従事して居る者が300余名ある入会者日に増加したれば月末に至らば修養生も50余名に達するであろう²¹。

力行会に入会するとまず3か月ほどの修養を経たのち、様々な職業を紹介された²²。修養生というのは、その期間の学生のことを指すのであろう。力行会は入会希望者に「上京直ちに苦学部に入らば直ちに職業にありつくと思ふ人々あれ共本会は適当の時期殊に修養せしむるが故に其積りにて上京せよ」と注意を与えている²³。

この頃の力行会の学生たちはどのようすに苦学に取り組んでいたのだろうか。ある学生の例を見てみよう。彼は「東京に於ける我苦学の実験」として鯛焼きの製法を紹介している。

2人協同でやると焼き尽す時分には1人が又原料を拵へると云ふ様にすれば一夜に売高56円はあります……

現今苦学の方法として新聞配達牛乳配達書生等種々方法はありますが之等は時間の不足又収入の不足等で到底自由な勉強は出来ず國を出づる時の心は何所へか去り手のつけられぬ堕落者となる様になりますが此の鯛焼などは奇抜で金と時間とに自由な苦学方法であらうと思ひます²⁴

当時、代表的な苦学の方法であった新聞配達や牛乳配達は、その労働時間の長さおよび収入の少なさから学業と両立できない者も多かった。これらの方に比べて鯛焼き販売の優位性を説いている。

次に渡米部についてみてみよう。島貫がアメリカ視察から帰国してまもなく創設された渡米部は、渡米を宣伝し、渡米希望者の相談を受けるなどの活動を行っていた。対象となるのは苦学生に限らず、貧しい者を救う方法として賃金の高い北米を中心とする海外への渡航を勧めるものであった。

(貧困に苦しむ者は——引用者注)
日本より賃銀の高い所なら北米に限らず海外何れへでも発展して内地の米を食はない上に年々何千萬円と云ふ金を送らせたが善い日本より労銀の低い満韓等へ無理無体に移民しようなどゝ力む事はあるまい²⁵

1906年度上半期の事業報告によれば、渡米部は会員増加411名、相談者数2189名、旅券を得たる数159名、出発者数213名である²⁶。これによれば、力行会は毎月300名以上の相談を受け、実際に20名以上の出発に関与していたことになる。

日本力行会の活動はその他にも多岐にわたるが、なかでも特色のある活動として、教育を重視し、複数の学校を設立したことを取り上げたい。いずれも移植民する者の養成を図った学校としては国内で早い時期のものである。とりわけ女子教育に着目し女学校を設立したことは特色ある活動であった。力行女学校の広告には「本校は在米同

胞の内助者を教育して渡米せしむべし、渡米し度婦人は申込まるべし」と説明されている²⁷。島貫は、渡米した日本人が精神的な安定を得て活動するためには、家庭を築くことが重要であると考えていた。その相手として彼らの「内助者」となる女性を育成することが目的だったのである。女学校を卒業した女性たちには現地で日本人男性を助け支える役割が期待されていた。

この他にも日米貿易を研究し振興するための日米実業学校も設立している。最初に着手しようと計画したのは緑茶の行商販売であった。学校設立の狙いは次のように紹介されている。経済的利益の獲得をいかに重視していたかが読み取れる。

日米貿易の研究と共に之が実行の方法を研究して日米貿易を作振せざるべからず、我等が金を得るの宝山は米国と清国とにあり、……我実業学校の最初着手せんとする事業は我日本緑茶の行商販売にあり、錫蘭茶と飽迄も競争して勝利を得るにあり、1500万円輸出の日本茶を2000万円にも3000万円にも増加して我國利民富を謀るにあり、世界的大活動を以て男兒の本領と心得奮進努力して其理想を達せんと欲する者は来るべし²⁸

おわりに

これまで見てきたように、島貫は貧民救済を志し、苦学生支援のために労働会を組織した。そうしてできた日本力行会は、しだいにアメリカをはじめとする海外への移植民の奨励事業にも取り組み、そのための教育を担う学校を設立するまでになった。

しかし1913年、彼は志なかばで病に倒れてしまう。死期を悟り、力行会の後継を託してアメリカ在住の永田^{いわ}、くら夫妻にその遺志を送った²⁹。永田は、島貫から引き継いた日本力行会を、日本を代表する移植民奨励団体にまで発展させていくことになる。

- 1 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、1頁。
- 2 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、5～6頁。
- 3 山路愛山は明治期のキリスト青年には、維新により苦汁をなめたいわゆる佐幕派諸藩出身が多かったとして押川方義の名も挙げている(『基督教評論』岩波書店、1966年、25頁)。
- 4 島貫兵太夫『軍人と基督教』救世社、1895年、32～33頁。
- 5 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、18頁。
- 6 島貫兵太夫『往て朝鮮に伝道せよ』『福音新報』第83号、1892年、14頁。
- 7 島貫兵太夫『朝鮮伝道』『救世』創刊号、1895年、5～6頁。
- 8 前掲島貫兵太夫『朝鮮伝道』、6頁。
- 9 「力行教会」『救世』第5巻81号、1909年、1頁。
- 10 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、23頁。
- 11 島貫のもとを訪ねた二人の青年とは、後に秋田日本基督教会の牧師となった谷津善次郎と、後に横浜に出て実業家となった大友栄造である(前掲相澤源七『島貫兵太夫伝』、40頁)。
- 12 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、36頁。括弧内は原文のまま。
- 13 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、51頁。
- 14 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、69頁。
- 15 新聞配達事業に関しては、初めはうまくいかなかったものの、のちにはいくつもの新聞配達界を経営し、東京の新聞配達界で相当な位置を占めるまでになったという(日本力行会創立100周年記念事業実行委員会記念誌編纂専門委員会編『日本力行会100年の航跡——盡肉救済・海外発展運動の展開、国際貢献』日本力行会、1997年、4頁)。
- 16 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、70頁。
- 17 前掲島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』、72頁。
- 18 「事務的才幹と伝道者」『救世』5巻78号、1909年、1頁。
- 19 「富める者の教会」『救世』5巻78号、1909年、1頁。
- 20 「貧生を自給勤学せしむる力行会は左の方針にて益貧生の為に尽さんとす諸君の賛成を仰ぐ」『救世』7号、1900年、3頁。
- 21 「苦学部報告」『救世』第5巻78号、1909年、7頁。
- 22 「苦学部広告」『救世』第5巻79号、1909年、7頁。
- 23 「苦学生に注意」『救世』第5巻79号、1909年、7頁。
- 24 恵樹生「鯛焼きの製法 東京に於ける我苦学の実験」『救世』第5巻78号、1909年、6頁。
- 25 「渡米部報告」『救世』第5巻78号、1909年、7頁。
- 26 「39年度上半期諸部 事業報告」『力行』4巻7号、1906年、6頁。
- 27 「力行女学校」『救世』5巻78号、1909年、7頁。
- 28 「日米実業学校」『救世』6巻87号、1910年、1頁。
- 29 永田(旧姓・神宮)くらは力行女学校の第1期生であり、開校式で生徒代表の祝辞を述べている(前掲『日本力行会100年の航跡』、46頁)。

本稿はJSPS科研費(課題番号「18K12514」)の助成による研究成果の一部である。

大熊智之(おおくま・ともゆき)

1983年生まれ。(韓国)光云大学校国際学部助教授などを経て、北九州工業高等専門学校生産デザイン工学科准教授。日本近代史。主な論文に、「東洋協会による『植民学校』の教育と変遷——台湾協会学校から植民専門学校まで」『韓日民族問題研究』(第27号、ソウル、2014年)、「崎山比佐衛の移民論と実践」『移民研究年報』(第23号、2017年)。

りっこう幼稚園だより



クリスマス会

もも組 庄司二千華



12月15～17日に、クリスマス会の聖劇を行いました。年少組は全員で羊の役を、年中組と年長組はみんなで役を分かち合いそれぞれの役を演じました。年中組と年長組は第一希望になれなかつたお友だちもいましたが、一人ひとりにぴったりの役を神様が与えてくださいました。どの学年も一つひとつ役を大切にしながら準備をしてきました。

年少組にとっては初めてのクリスマス会のため、みんなでクリスマスはどんな意味があるのかを知るところから始まりました。たくさんの歌を楽しみながら歌ったり、「メエメエメエ」と口にしながら一人ひとりが自分らしい羊になって舞台にあがることができました。年中組は数人のお友だちと心を合わせてひとつの台詞を言います。年長組は一人でひとつの台詞を言います。その台詞が書い

てある紙を誇らしげに見せ、大事そうに握り締める姿が印象的でした。本番は緊張の表情も見られましたが、それも今まで真剣に取り組んできたからこそ表情だと感じました。自信を持ってステージに立ち、練習の成果を出し切り、大きな拍手を頂くことができました。

温かい気持ちでお友だちと一緒に演じる楽しさ、喜びを味わった子どもたち。一人ひとりが、役を演じながらキラキラ輝いていた3日間でした。これからもお友だちと様々な思いを共有し、今日のような温かい気持ちで毎日を過ごせるよう願っています。



節分

もも組 小沢歩未



2月3日の節分に、豆まきを行いました。りっこう幼稚園の豆まきを経験している年長組さんと年中組さんからは、「明日鬼来て欲しくないなあ。もも組の時もすみれ組の時も怖くて泣いているんだもん。」といった声や、「鬼が来たら豆を投げなくちゃ！」といっ

た声もあり、前日からソワソワ、ドキドキしている子どもたちの姿がありました。

当日、園庭に全園児が集まると、「ああ鬼が来たらどうしよう…。」と不安で表情がこわばる子もいれば、鬼の仮装をし、鬼を倒す為の武器を手に

持っている子もいました。最初にみんなで「鬼は外！ 福は内！」と力いっぱい豆をまきました。園庭に子どもたちの元気な声が響き渡りました。するとそこに赤鬼、青鬼、緑鬼がやってきました。「怖い怖い！」と言ながら必死に先生の後ろに隠れる子や涙目に

なりながらも一生懸命鬼に豆を投げようとする子、園庭を走って逃げ回る子、笑いながら鬼に豆をまき楽しそうにしている子、様々な子どもたちの姿がありました。みんなで力を合わせ、無事鬼を退治することができました。

こうして子どもたちが日本の伝統行事に触れる体験をし、また1つ経験を重ねることができ嬉しく思います。これからも子どもたちが沢山の経験をしながら成長していく様子を願っています。



卒園式

ゆり組 水口 茜

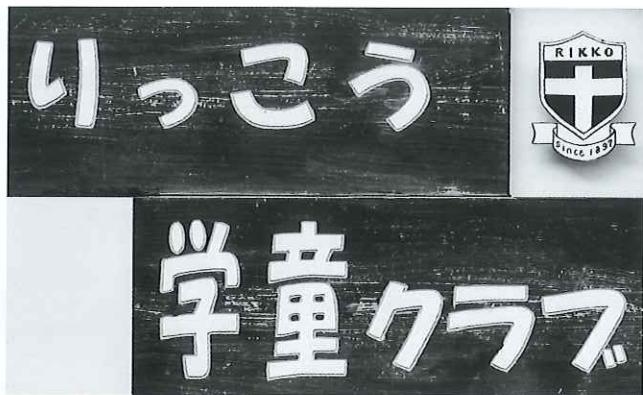


3月18日、卒園式を行ないゆりぐみが幼稚園から卒園へと進みました。嬉しく、ちょっぴり寂しい気持ち、いろいろな思いを抱きながらも「卒園式がんばるぞ！」と式に臨んだ子ども達。お家の方に見守られながら礼拝堂に入場しました。尾山牧師がお祈りをして下さった後、いよいよ卒園証書の授与が始まります。一人ひとりが堂々と返事をし、壇上に登って証書を受け取る後ろ姿はとても頼もしく、胸が熱くなりました。また、大舞台を終えて自分の席に戻る表情からは、それぞれの「やり切った！」という気持ちがにじんでいました。『さよならぼくたちのようちえん』を歌い、最後に『はじめの一歩』の歌とともにお家の方への感謝の言葉を送りました。おいしいお弁当をつくってくれたこと、毎日の送り迎え、いつも見守ってくれたこと…子ども達が考えて作った言葉は、きっとお家の方の心に響いたことだと思います。りつこう幼稚園で沢山遊び、時にはケンカをしたり上手くいかなかったり、壁に当たることもありましたが、自分なり

に試行錯誤しながら乗り越えてきました。お家の人と手をつないで入場した入園式から3年。大きく成長した姿を見せてることができたと思います。園生

活で培ったものを糧に、一人ひとりが自分らしく歩んでいけるよう、心より願っています。





新しい1年生が入ってきて、お友達同士で名前と顔を覚えようとしてもマスクをしているのでなかなかお互いの表情が分からぬ中始まった1年間。マスクを外すのはお昼ご飯やおやつを食べる時だけ。本来はみんなでワイワイ

イ楽しく食べて盛り上がる時間も新型コロナウイルス感染防止のため、おしゃべりを禁止にして少し寂しい雰囲気になっています。マスクを外した子どもたちの素の表情を見られるのはもう少し先になりそうです。

ハロウィン

今年のハロウィンは今までとは一味違います。例年であれば小竹町の町に子どもたちが仮装をしてお菓子をもらいに出かけていましたが、今年度は違います。学童クラブがある建物の2階には普段、日本に勉強をしにきている留学生がたくさん住んでいます。今年度は海外から留学生が入国できない影響で留学生の人数も少なかったことから、その2階スペースを貸していただきました。階段から部屋の壁、廊下にまで装飾をしてちょっと怖いお化け屋敷風の場所ができあがりました。

子どもたちはハロウィンに向けて身にまとうマントや、お菓子を入れるバッグを自分たちで作ります。マント作りはハサミで少し難しい切り方をするので1、2年生は、3年生に手伝ってもらいました。こういうところで進んでお手伝いをしてくれる3年生はとても頼りになります。「こうやって切るんだよ」「ここ持ったら切りやすいよ」と大人顔負けのアドバイスをしていました。

ハロウィン当日は、作ったマントとバッグを持って小さな魔女やドラキュラさんたちが歩きます。怖いお化け屋

例年通りであれば公共交通機関を使って少し遠くに出かける遠足の楽しかった思い出やイベントなどの様子をこの力行世界でお伝えしていますが、長い間続く新型コロナウイルスの影響で想定しているようなイベントが思うようにできていないのが現状です。子どもたちも「コロナだからだよね~」とイベント中止の理由をすぐに理解してしまうのが、少し切ない気持ちになります。そんな中でもスタッフ一同、子どもたちとの生活を楽しいものにするために、様々な工夫をして出来る限りのイベントを行ってきました。その中でも子どもたちに人気があり、今年度ならではのイベントを2つ紹介します。

キーからお菓子をもらえます。さすが世界のスーパースター。子どもたちが周りにたくさん集まっていました。

地下ホールには、ミニオンとスティッチがいます。ここではハロウィンの絵を描いて、ミニオンにじょんけんで勝つとお菓子がもらえます。子どもたちはカボチャやこうもりなど自分が思うハロウィンの絵を描いていました。

色々なキャラクターにたくさんのお菓子をもらった子どもたち。コロナ禍でも最高の思い出になりました。

敷風の国際館2階へ行くと待ち受けたのは野獣です。なにやら看板を持っています。『しりとりをつなげろ』子どもたちはしりとりがつながるように言葉を書き、クリアしたら先へ進めます。この先は暗くて怖~い部屋を開けてスタンプを3つ集めてくるミッションです。無事にスタンプを3つ集めるとミッ



◀国際館2F



地下お絵描き▶



ミッキー



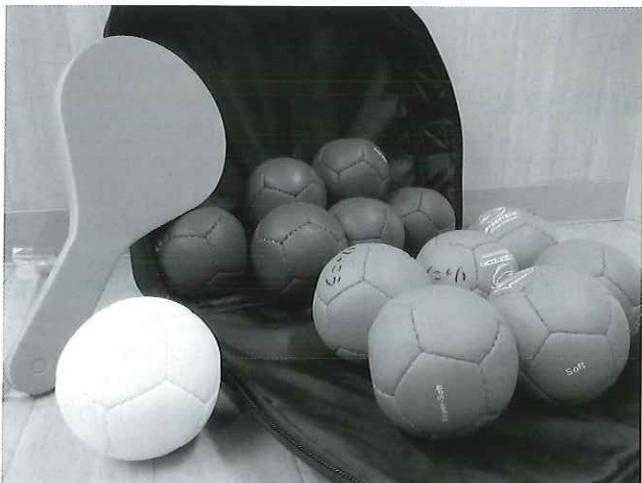
野獣

ボッチャ

8月、東京オリンピック・パラリンピックが始まり、野球、バスケットボール、ソフトボールなどいくつかの競技をテレビで観戦しました。コロナ禍でしたが自国開催でもあり、子どもたちは選手の活躍に熱い声援と歓声をあげていました。

最近はパラリンピックの競技にもなっているボッチャを取り入れています。地下ホールに正式のものより少し小さめのコートを作り楽しんでいます。青チーム赤チームに分かれた対抗戦ですが、学年の違いで力の差が出ないのも皆で楽しめる魅力の一つです。回数を重ねるごとに子どもたちはメキメキと腕を上げ、今ではチームで戦術を考えたりする微笑ましい姿も見られる様

になりました。来年度は、地域の方々と交流戦を行う予定なので、練習を重ね、ぜひ良い笑顔がみられるように頑張ってほしいです。



日本力行会と渋沢栄一の接点： 人的交流の観点から(1)

名村優子

(サンパウロ人文研日本支部理事)

日本力行会（以下「力行会」と表記）は今年、創設125年を迎えた。その事業は苦学生支援から始まり、苦学の適地として米国を見出していくのは、米国、ブラジル、満洲、戦後ブラジルと主要な渡航先を変えながら、1970年代まで一貫して移植民事業、移植民教育事業に携わってきた。この力行会の歴史を紐解くと、少なからぬ著名人との関わりが見いだせる。機関誌『力行世界』等には内村鑑三、ラス・ビハリ・ボース、満川亀太郎などの論考が掲載され、会の顧問や寄付者として大隈重信、相馬愛蔵、新渡戸稻造らが名を連ねている。このような支援者の中の一人に、近代日本資本主義の父とも言われる渋沢栄一も含まれていた。

1840年アヘン戦争の年に生まれ1931年満州事変の年に没した渋沢栄一は、約500の民間企業、600ほどの社会事業に関わった。明治の幕開けと同時にじまつた日本人の海外移植民事業と関りを深めたのは1900年代、渋沢が還暦を過ぎてからである。渋沢は日本移民協会、東洋拓殖株式会社、ブラジル拓殖株式会社の顧問や相談役などを務めるなど、朝鮮やブラジルでのインフラ整備事業や開発事業に積極的に関わった（名村2019）。その一方で、北米等へ移民を送出した移民会社の事業には参画しなかった。その理由は、渋沢が明治初期の移民会社による移民事業を近世の奉公人請宿や人入れと同等の、「動もすれば移住労働者の頭金を貪るを本色とし、甚敷に至りては、移住民の無智なるに乗じて猥りに出稼地を変更し、以て暴利を貪るも」ような事業と見なしていたからだと考えられる。（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』55巻）。

では、開発・拓殖事業に積極的に関わる一方で従来の移民事業に批判的だった渋沢は、いつから、どのような経緯で日本力行会と関りをもつようになったのだろうか。史料の制限はあるが、力行会と渋沢栄一の接点、および両者と交流のあった人物との接点を探ることにより、力行会の事業と渋沢の指向する海外事業、社会事業および教育事業がどのように重なっているのか検討していきたい。

渋沢による力行会への支援・関与が確認できるのは、現在のところ1902年、1913年、1923年、1926年、1930年、1931年の6回である。1902年4月18日、力行会は最初の慈善音楽会を東京上野音楽学校で開催したが、この音楽会の賛成者として近衛篤磨や大隈重信らと共に渋沢が名を連ねている。さらに音楽会

の収益を苦学生補助や海外派遣、出版部開始といった会の事業へ充てる事についても賛成者の一人となっている（『力行』I）。1913年の正月には会員のために開催された數入りの餅馳走会のために5円を寄付した記録が残っている（『力行世界』121）。1923年は力行会が日本力行会海外学校を開設し、各種学校としての認可を受けた年である。この海外学校の校舎建設および力行会本部移転のために寄付金を募集したが、その際に渋沢は力行会（もしくは寄付金募集組織）の顧問を務め、自らも500円を寄付している（『日本力行会海外学校設立趣意書』）。さらに1926年、1930年、1931年にも会の顧問として名前が確認されている（日本力行会創立百周年記念事業実行委員会・記念誌編纂専門委員会1997、『日本力行会要覧（昭和五年三月改訂）』、『日本力行会要覧（昭和六年五月改訂）』）。力行会の要覧や事業報告は残存年代に偏りがあり1920年代のものは少ないが、日本力行会海外学校が設立された1923年頃より渋沢の没年の1931年まで顧問であった可能性がある。

以上のように、力行会と渋沢との直接的な関係は断続的にしか確認できないが、それぞれの時期における力行会の活動状況および会の支援者と、渋沢の交際関係を確認していくと、力行会と渋沢の接点がどこにあったのか、どのような関係性の中にあったのかが推測し得る。

1902年および1913年は会の創設者島貫兵太夫が会長であり、1923～1931年は第二代会長永田稠が会をひきいていた時期である。ここでは渋沢と会長個人との関係に着目し、島貫会長時代、永田会長時代に分けて検討していきたい。

I. 島貫兵太夫会長時代 (1897～1913年)

I -1. 1902年頃の会の状況と渋沢栄一との接点

1902年頃の力行会は、従来の苦学支援に加えて渡米支援事業が評判を呼び会員数が増えているが、会費を徴収しなかつたため会の経営は苦しかった。そこで、事務や機関誌発行の費用を捻出するために上野音楽学校での慈善音楽会を企画した。音楽会は著名人の賛同もあって盛況に終わり、以後千葉、静岡、八幡、名古屋、大阪等各地で次々と開催された。機関誌『力行』の記事によると、各地での音楽会・演芸会は1902年から1905年にかけて少

なくとも16回開催されている。しかし「音楽会は、会員の熱烈な活動と、名士、貴婦人諸氏の多大なる賛成に依つて行く所として可ならざるは無く、意外の効果を見、切符の売り上げも随分あつたのに、最初のうちはさうでなかつたが後々になると、全体の会計の結果は却つて損失を見たのである」（島貫1911）とあるように、盛況にもかかわらず力行会の経営状況は改善しなかったようである。上野での音楽会の発起人は島田三郎、本多庸一をはじめとする44名、賛成者は大隈や渋沢ら5名で、キリスト教界・教育界・政界・財界等の著名人が名を連ねていた（『力行』I）。

前に述べたように、この音楽会の記事が力行会と渋沢の関わりを示す最初の記録である。では力行会および会長の島貫は、どのような契機で渋沢と関りを持つようになったのだろうか。

音楽会の発起人・賛成人として名を連ねた著名人は、1902年時点では力行会と何らかの形で関わりのあった人物と考えられる。この中には1902年以前から渋沢栄一と親交のあった大隈重信や江原素六等の名前があり、彼らが力行会と渋沢を繋いだ可能性がある。しかし渋沢と島貫が面識を得る機会をつくったのは、この発起人の中でも特に力行会と関りの深い押川方義である可能性が高い。

I -2. 朝鮮伝道および大日本海外教育会の活動と押川・島貫

押川方義（1849-1928）は伊予松山藩士の家に生まれ横浜で洗礼を受けたキリスト者である。仙台神学校（のちの東北学院）創設者の一人で、仙台を拠点に伝道をするかたわら朝鮮や満洲での教育事業に関わった。1901年に東北学院を去ってからは鉱山開発等の事業を手がけた。大隈重信らと親交があり衆議院議員を六年間務めたほか、アジア主義者として「朝鮮利権」事件や満蒙独立運動などに関わった人物である（河西監修2013）。力行会の創設者島貫兵太夫は仙台神学校の第一期生で押川の一番弟子と目されていた。恩師である押川は力行会創設以前より島貫の重要な支援者の一人で、『救世』『力行世界』といった力行会の機関誌に度々談話を寄せていた。島貫が病没した際には押川が葬儀のミサで説教をするなど、終生関係は続いた。

この島貫と押川の生涯の関わりの中で、両者が渋沢栄一と知り合う契機となったのは朝鮮伝道および大日本海外教

育会の活動だと推測される。島貫は東北学院在学中の1892年に1か月余り朝鮮に滞在し、朝鮮の貧民問題の調査や中国人・朝鮮人・在朝鮮日本人への伝道を行った。さらに帰国後は「東京同志会」を立ち上げ会員を朝鮮へ派遣し、日本基督教会に対し在朝鮮日本人への伝道と朝鮮人留学生の受け入れを建議した。松谷2016によると、これら島貫の朝鮮伝道に関連する活動は押川の意向を反映したものであり、押川は島貫と同様に朝鮮および朝鮮伝道に高い関心を持っていた。

1894年押川は、海外特に朝鮮国への教育実施を目的とする大日本海外教育会を設立する。発起人は押川ほか本多庸一、原田助、松村介石、巖本善治の5名であった。大日本海外教育会の「告白」および「憲法」「会則」を見るかぎり、キリスト教の理念を明示する文言や宗教活動に関連する目的は示されていない（押川ほか1895）。しかし松谷2016は、会の発起人5名だけでなく賛同者にもキリスト教界の重要人物が名を連ねている事、朝鮮の外国ミッションとの競合を避けるために会名から「伝道」を外し「教育」を入れたという事実があることなどから、島貫・押川の主唱した朝鮮伝道計画が大日本海外教育会の事業に相当部分継承されていたと考えている。ただし島貫自身は1911年刊行の『力行会とは何ぞや』においてこの二者の繋がりについて全く触れておらず、靖国神社で偶然押川と再会した際に、大日本海外教育会への協力を求められたと述べている。この理由について松谷2016は、大逆事件や朝鮮でキリスト教徒が検挙された105人事件との繋がりを疑われる可能性のあった島貫が、自らの朝鮮との関わりについて触れるのを避けたのではないかと推測している。

大日本海外教育会において島貫が担った具体的な活動について、島貫は「余が曾て朝鮮に視察伝道に行つて來た為め大に關係があるところからしてその教育会の為にあらゆる名士を訪問して賛成を求めて呉れといふのであつた、（中略）そこで余は次の日からして垢のついた衣物に裾の切れた袴を穿いて腰に手紙をぶらさげ直に名家訪問を始め勝安房さんや大隈伯や板垣伯などの屋敷へ二人引きの俾を飛ばせた。」（島貫1911）と記しており、会の賛同者を集めるために各界の名士を訪問し面識を得ていた事がわかる。和田2012は島貫の活動について「押川方義を手伝つての大日本海外教育会の準備作業では、当時の各界の名士を訪問しており、そのつながりは、後に『現今日本名家列伝』発行へつながっていく。」としている。『現今日本名家列伝』は力行会の無月謝中学設立資金を得るために企画された書籍で、「現存せる先進諸士の功を成し、名を揚げたる実際の経歴談」をまとめて1903年に出版された。同書には「本会の主旨を協賛せる有力家」をはじめとして、

官位名望の顕著なるもの、在朝在野の遺賢、冒險家、発明家など約2000名の「名家」の経歴が収められており、この中に渋沢栄一、大隈重信、新渡戸稻造の名も見られる。大日本海外教育会での島貫の名士訪問が、この『列伝』の発行のみならず、力行会の支援者獲得の契機となつた可能性は十分に考えられる。

もっとも、島貫が大日本海外教育会に関わっていた時期はそれほど長くはないようだ。「余がそこ（大日本海外教育会：筆者注）を辞してからも段々発達して大隈伯が会長押川先生が副会長渋沢男を会計主任にして伊藤公を顧間に戴き立派に成立して多くの韓人青年を教育したのである。」（島貫1911）とあるように、渋沢が会計主任となる1899年以前に島貫は大日本海外教育会を辞めていた。島貫は1897年に渡米しており、この時までに大日本海外教育会を辞めていた可能性がある。島貫は帰国後「日本の苦学生を苦学せしむるには米国に行かしむるに限る」と確信し、島貫独自の「靈肉救済」による伝道・救貧という理念を苦学生支援・渡米支援に具体化させていく。

I -3. 渋沢の朝鮮との関わりと島貫との接点

一方、押川と渋沢の接点が確認できるのは1898年の渋沢の朝鮮訪問以降である。渋沢は1898年5月に京城を訪問した際、大日本海外教育会が1896年に設立した日本式の教育機関である京城学堂を参観し、演説・寄附を行った（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』27巻）。この学堂訪問について、渋沢は「初めて昨年（1898年：筆者注）朝鮮に参りまして京城学堂のあることを知つた時に、日本に海外教育会といふものゝあることを知りました、其前から海外教育会には会員となつて居りましたけれど、甚た其力が足らぬ為に振はずに居りましたから、世人からどういふ会であるといふことすら能く覚えて居らんなどと云ふ位の有様であつた」と述べている（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』27巻）。この発言からわかるように、渋沢は1898年以前から大日本海外教育会の会員であり、押川とも面識があった可能性がある。しかし具体的な交流が確認できるのはこの朝鮮訪問以降で、これを契機として渋沢は大日本海外教育会に深く関わるようになった。『渋沢栄一伝記資料』には押川と渋沢が同会の事業や朝鮮協会の設立について何度も会合を重ねた様子や、渋沢が紹介状を書いて寄附集めに協力する記録が残っている。また前述したように渋沢は1899年より1909年まで大日本海外教育会の会計監督を務めている（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』27巻）。

当時、渋沢は朝鮮半島を日本の安全保障上の要地と考えており、日本との経済関係を緊密にする必要性から、京仁鉄道

（1896年着工）、京釜鉄道（1901年着工）敷設事業などの開発・インフラ整備事業に奔走していた（片桐2010）。日本の資本や商工業者が朝鮮に進出する際に日本語や日本文化を理解する朝鮮人材が必要になると認識していたことから、朝鮮において日本式教育・日本語教育を行う京城学堂および大日本海外教育会の事業に関与したと考えられる。

このような状況から推測すると、1902年における渋沢の力行会への賛同は押川の大日本海外教育会事業が契機である可能性が高い。具体的な状況については、渋沢が大日本海外教育会の会員になった時期と経緯がわからないので断定できないが、以下の①～③のいずれかの状況があつたと推測できる。

- ①島貫が1895年頃に大日本海外教育会の賛同者を集めため名士宅を訪問していた際に直接渋沢との面識を得た
- ②島貫が名士宅を訪問した際、大隈重信や江原素六といった力行会の支援者となる人物と面識を得て、後に彼らを通じて渋沢と関りを持った。
- ③島貫が大日本海外教育会を離れた後、押川を通じて渋沢と面識を得た。いずれにしても、島貫が師押川の勧誘により大日本海外教育会の事業に関わる中で、各界の名士との繋がりを持ち、それが力行会の支持者を得る一つの基盤になった事が推察できる。

○参考文献

- 押川方義ほか1895. 大日本海外教育会告白. 女学雑誌 415：前付。
河西晃祐2016. 押川家文書の可能性—史料整理の現状と課題—. 東北学院史資料センター年報1：34-42.
河西晃祐監修2013. 『押川方義とその時代』学校法人東北学院。
片桐庸夫2010. 渋沢栄一と朝鮮—京釜鉄道と京仁鉄道敷設問題を中心として—. 渋沢研究20：3-37.
島貫兵太夫1901. 『最近正確渡米案内大全』中庸堂.
島貫兵太夫1911. 『力行会とは何ぞや』警醒社.
名村優子2019. 渋沢栄一のブラジル植民事業支援. 飯森明子編著『国際交流に託した渋沢栄一の望み』ミネルヴア書房：110-114.
日本力行会出版部1903. 『現今日本名家列伝』日本力行会.
日本力行会創立百周年記念事業実行委員会・記念誌編纂専門委員会1997. 『日本力行会百年の航跡』日本力行会.
松谷基和2016. 押川方義と朝鮮の関係史序説—朝鮮伝道計画から大日本海外教育会へ—. 東北学院史資料センター年報1：43-49.
和田敦彦2012. 『救世』解説. 『『救世』解説・総目次・索引』不二出版：5-19.

○参考資料

- ・『救世』（第一次）1～20、1895～1897？（第二次）1～99、1899～1911.
- ・『渡米新報』1(1)～7(3)、1907～1909.
- ・『力行』(1)～5(10)、1903～1907.
- ・『力行世界』120～129、1913.
- ・『日本力行会要覧（昭和五年三月改訂）』（長野県立歴史館所蔵『昭和五年四月 移植民関係学校団体要覧編冊 信濃海外協会』）
- ・『日本力行会要覧（昭和六年五月改訂）』（日本力行会所蔵永田史料 N-81-3）
- ・『日本力行会海外学校設立趣意書』（日本力行会所蔵永田史料 N-82）
- ・デジタル版『渋沢栄一伝記資料』(<https://eichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/index.php?TOP>)

力行会所蔵貴重資料修復・復刻作業

—昨年度同様に、現在も継続実施中—

当日本力行会資料室には、多くの研究者や関係団体の方々からも一目を置かれている海外発展移住関係資料を多数保存し、特に戦前の移植民関係資料（ブラジルや満州を中心として）においては今なお、未発表の資料や世界レベルでも当会しか保存しない資料も多数保存され、それらを求めて多くの研究者が閲覧のために連日多数訪れている。

ただ、これらの資料の中には保存状況により破損や破れなど経年劣化が激しく、すでに閲覧に堪えない資料も多くなっていたことから、これらの事情を関係団体と相談したところ、一昨年度より、JICA横浜と海外日系人協会と協力で、現在、JICA及び国会図書館レベルで所蔵されていない資料から順番に、調査、修復復刻作業を現在も継続的に実施されている。今年度においては、特に南米パラグアイにて戦後発刊されていた日本語新聞「サンデーパラグアイ新聞」とアルゼンチンのコルドバにて戦前発刊されていた「コルドバ日本人会会報」の修復及び復刻作業が行われ、先日修復されたこれら原本と復刻版のデーター資料が当会資料室に寄贈された。なお、復刻データー

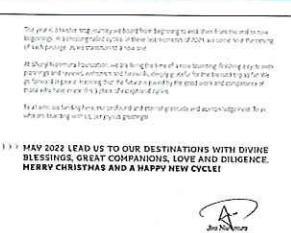
については、JICA横浜の史料館にて閲覧可能となっているが、当館資料室にても閲覧可能となっており、希望者は当会事務局までご連絡下さい。

なお、現在も引き続きこの作業が行われており、完了次第当会HPにも掲載予定です。復刻されたデーターが多くの関係者に目に触れることで、またあらたな歴史の一頁が開かれる期待します。

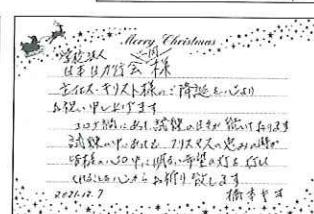


修復されたサンデーパラグアイ新聞

各国からの年賀状



▼ ブラジル
西村財團



▲サンパトロ国際保護協会

▲社会福祉法人信愛会

日本力行会機関紙「力行世界」定期購読会員ご加入のお願い

拝啓 春風駄蕩の候 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。日頃より多大なご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

当会はお陰様で創立124年を迎ました。「日本民族の靈肉救済」を旗印に、苦学生及び渡米希望者に支援や便宜を与え、さらに青年の移住斡旋や現地教育にも傾注し、北米、中南米、東南アジア、旧満州へ約3万人の移住者を送り出し今日に至っております。

創立80周年には、記念事業として創立理念をさらに発展させ、“世界と日本の架け橋となる人材育成”“海外同胞との連携強化”などの実現を目標に、留学生会館・「国際交流会館」を新設し、各国からの留学生を迎え、日常生活を通して日本文化を習得しながら修学や研究に励めるような環境つくりと支援活動を続けて参りました。

ご賢察の通り、今回、世界的に感染爆発を迎え、今なお収束を迎えていないCOVID-19ウイルスにより、ひと・モノ共に世界的レベルでの往来が途絶え、当会館に入館予定であった多くの海外からの留学生の日本入国が阻まれ、いまなお原状回復が見込めない困難な運営状況であると共に、日本に滞在する会館留学生においても本国の仕送りが途切れ、アルバイトによる生計もままならない危機的な状況を迎えております。

つきましては、より積極的な国際交流の継続をご理解頂き、当会活動理解の為、『日本力行会機関紙「力行世界」定期購読会員』のご加入を頂きたくお願い申し上げます。また、ご友人や国際交流にご関心を抱かれている方々への紹介も合わせてお願ひいたします。

末筆になりましたが各位の益々のご健勝と弥栄を祈念いたしております。

敬具

記

『日本力行会機関紙「力行世界」定期購読会員』制度についてのお知らせ

個人会員 年額一口 ¥ 3,000円

法人会員 年額一口 ¥20,000円

□口数の制限はございません。会員期間＝2022年4月1日～2023年3月31日》

(会員特典)

★各種講演会などの行事のご案内

★機関誌「力行世界」のお届け

★ゲストルームの優待宿泊利用（一泊5,000円を500円引き年間7泊まで）

(ご送金方法) 同封の郵便振替用紙をご利用ください。

以上

令和4年4月15日発行

(学)日本力行会

〒176-0004

東京都練馬区小竹町2-43-12

電話 03-3972-1151(代)

FAX. 03-3972-1264

E-MAIL: rikko@rikkokai.or.jp

ホームページ

<http://www.rikkokai.or.jp>



△アルモニア教育文化協会